

## 山野 貴史 内容の要旨

氏 名	山野 貴史
学位の種類	博士（医学）
学位記番号	甲第 1348 号
学位授与の日付	平成 29 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 3 条第 1 項第 3 号に該当

## 学位申請論文タイトル及び掲載誌

再発・転移性腫瘍に対する緩和的放射線治療が、患者の生活の質ならびに精神心理面に及ぼす影響について

## Thesis

学位審査委員（主査）教授 菅澤 正

（副査）教授 高橋 孝郎、教授 川田 哲也、准教授 柴崎 智美

## 論文内容の要旨

## 【目的】

がん治療は、これまで生存期間や局所制御に代表される客観的アウトカムによって評価されてきた一方で、主観的（患者立脚型）アウトカムである生活の質（Quality of Life; QOL）の重要性が近年高まってきている。特に緩和治療においては、主観的アウトカムの評価がより重要である。主観的アウトカムの評価法としては問診にて評価を行う質的評価法と、自記式調査票を用い統計的に解析を行う定量的評価法に分けられる。海外では各疾患に対する定量的評価法の尺度が種々開発され、これら評価法を用いた報告が散見される。しかしながら国内において緩和的放射線治療（緩和照射）における報告は質的評価法に基づく報告が主であり、QOL 定量的評価を行った報告はほとんどみられず、また国内で緩和照射患者に対して国際的な QOL 尺度を用いた報告は認められない。加えて照射領域・照射体積面から有害反応面における QOL について評価を行った報告は国内・海外ともない。今回われわれは緩和照射患者の QOL ならびに精神心理面の変化について、がん治療に用いられる国際的に広く使用されている定量的評価尺度を用い、緩和照射における QOL ならびに精神心理面における変化を調査するとともに、有害反応面において照射領域・照射体積における評価を行った。

## 【方法】

2014 年 10 月から 2016 年 1 月に緩和照射を施行した 67 例を対象に緩和照射前と緩和照射終了時に各々評価を行った。評価項目は全身状態として ECOG PS（Performance Status）、質的評価法として NRS（Numerical Rating Scale）、Face Scale の評価を行った。定量的評価法は QOL について EORTC QLQ-C30, EORTC QLQ-C15PAL を用い、精神心理面評価については HADS（Hospital Anxiety and Depression Scale）を用いた。

## 【結果】

緩和照射後の疼痛改善割合は 81.8%であった。PS は緩和照射前後で有意な変化は認められなかった。QOL 評価において照射終了時に疼痛・不眠・感情機能・疲労の項目でスコアの有意な改善が認められた。骨転移患者群では EORTC QLQ-C30 において全般的な QOL の項目も改善が認められた。嘔気・嘔吐ならびに下痢の項目において放射線治療後有意に増悪が認められ、放射線照射

体積が他の部位と比べ増大傾向であった骨盤照射でスコアの増悪が認められた。精神心理面の評価では70歳未満の群において不安（Anxiety）の項目で有意に改善が認められた。

#### 【結論】

緩和照射後に複数の項目においてQOLの改善が認められ、特に症状が顕著な骨転移患者群では一般的なQOLの項目も改善が認められた。放射線治療前後のPSの変化にかかわらず、緩和照射はQOLを改善させる可能性があることが示唆された。緩和照射は有害事象に配慮した治療計画が重要であるが、放射線照射体積が増大する場合は照射野や処方線量の設定に注意が必要と考えられた。